川村学園女子大学研究紀要　第8巻　第1号　1頁—17頁　1997年

心理動詞の使役性：日英仏語の比較研究

羽　鳥　百合子

Causativeness of Psychological Verbs: A Cross-Linguistic Study of Japanese, English and French

Yuriko HATORI

Abstract

There is a striking contrast between Japanese psychological verbs (psych-verbs) that are essentially Experiencer-as-Subject verbs and English psych-verbs that are mostly Experiencer-as-Object verbs. French psych-verbs share both properties in that they are basically EO verbs, but can alternate into ES verbs by a lexical binding operation. This paper aims to characterize the lexical semantic properties of the psych-verbs of each language and to give an account of the fact that English psych-verbs do not undergo the lexical detransitivization corresponding to French lexical reflexivization. It is proposed that the Causer of English cannot take the feature +PSYCH, so that the lexical binding never takes place between the Causer and the +PSYCH argument. We suggest that this is related to the basic semantic view of English that human emotions are beyond the conscious control of the individual.

Key Words: psychological verbs, lexical semantic structure, unergative verbs, detransitivization, external causer

1．はじめに

英語では，日本語の「喜ぶ」「驚く」「こわがる」等に直接対応するような自動詞としての心理動詞が発達しておらず，多くの場合，他動詞の過去分詞表現を用いることは周知の事実である。

(1) a. He was pleased/surprised/frightened.

b. 彼は喜んだ／驚いた／こわがった。

即ち，日本語の心理動詞では経験者がそのまま主語になるのに対して，英語の心理動詞の多くは経験者を目的語としてとる他動詞である。以下，経験者を主語としてとる心理動詞をES動詞，経験者を目的語としてとる心理動詞をEO動詞と呼ぶ。英語のES動詞としては，love, admire, fear, hate, detest, careなどのように，対象に対する価値判断を示し，状態動詞としてつかわれるものが多いが，本稿ではこのような動詞類は扱わない。

EO動詞の中には，自動詞化して経験者が主語となるものもあるが，極めて少数の動詞に限られている。次に示すworry, delight, grieveなどがその例であり，いずれも感情の対象を前置詞句としてとっている。

(2) a. I worry about her constantly...

b. He delighted in his love of birds with children.

c. He's grieving over his dead wife and son... (Cobuild)

一方，フランス語やロシア語では，他動詞に接辞化した再帰代名詞(clitic)が付加した再帰動詞が発達しており，多くのEO動詞がこの形でES動詞化している。次にフランス語及びロシア語の例をそれぞれ示す。

(3) a. Le bruit étonne Marrie.

'the noise amazed Marie'

b. Marie s'étonne du bruit qu'on fait sur cette histoire.

Marie refl-amazes at the fuss that one makes about his story

'Marie is amazed at the fuss made about this story' (Pesetsky 1995: 97)

(4) a. Eë povedenie/Eë postupok udivljaet Ivana.

her conduct/her action-NOM surprises Ivan-ACC

b. Ivan udiviljaet-sja eë povedeniju/eë postupke.

Ivan-NOM surprise-refl at her conduct/her action-DAT (ibid.: 98)

Pesetsky(1995)の分析は上に示したような日本語，英語，フランス語，ロシア語すべての心理動詞を統一的に扱おうとした試みである。本稿ではPesetskyの分析を批判し，日本語と英語の心理動詞は元の意味構造が異なっており，これは両言語における感情表現の意味的な捉え方のちがいに根ざしているのではないかという主張を行なう。特に，英語にも部分的に見られる心理動詞の再帰的用法に注目し，フランス語の再帰用法と比較しながらその特性を明らかにする。

2. Pesetsky の分析

Pesetsky(1995)は，英語の心理動詞にES動詞が少ないという事実を "gaps in the English lexicon"(p. 96)とし，これを説明するために，ES動詞としてのamuseが実は拘束形態素(以下，彼の表記に従って√amuseと表わす)であるために，そのままの形では顕在化しないのだという主張をしている。従って，√amuseには常にCAUSというゼロ形の接辞がついて，他動詞としてのみ用いられるというのである。この主張の最も強い根拠は，名詞形のamusementが，他動詞としてのamuseではなく√amuseに対応しているという点である。これと平行して，フランス語の他動詞étonner(驚かす)も再帰動詞s'étonner(驚く)にCAUSがついたものであると考えている。それなら名詞形は，s'étonnementでよさそうだが，実際にはétonnement(驚き)となるのは，派生形態素(ここではment)は接辞のseやCAUSと共起できないという制約があるためだという。

この分析にはいくつかの問題点がある。第一に，ゼロ形の接辞に使役化という非常に大きな意味概念を担わせていることである。影山(1995)は，有形の接辞が特定の意味をもって基体の意味構造を組み替えることができるのに対して，ゼロ形態には，より限定的な意味操作しか許されないと論じ，ゼロ形態素による使役化を禁じている。ここで影山が念頭においているのは，例えば自動詞breakが使役化して他動詞breakを生ずるというような操作であるが，Pesetskyは全く顕在化しない自動詞√amuseを元の形として提案しており，その点でもCAUSが果たす役割は極めて大であり，影山とは相いれないものである。第二に，Pesetskyは上述のように，フランス語では，接辞化した代名詞seがついた形式から接辞のついていない形式を派生させようとしているが，これも言語的には不自然な操作と言わざるを得ない。ここでは再帰形の方をより基本的なものであると考えているが，多くの言語において，再帰表現は有標の形式を用いることが多く，有標の形式が無標の形式の元にあるという前提には無理がある。第三に，英語とフランス語を同一に扱おうとするために，英語の√amuseの本性を再帰動詞とみなしているが，なぜそれが拘束形態素なのかという本質的な説明はなされていない。言い換えれば，worryやdelightのようにごく少数の動詞に限ってES動詞として顕在化することが許され，なぜ圧倒的多数の他の動詞はそれが許されないのかという答えは出されていない。第四に，英語には，例えば次のようなoneselfを伴う心理動詞構文がやや周辺的な構文としてではあるが，存在する。これはどう扱うのであろうか。本来的に再帰動詞であるものが使役動詞になり，それが更に再帰的に用いられているということになるのだろうが，これも不自然な説明である。

(5) a. She yawned, and wondered what she could do to *amuse herself* until supper-

time.(OED)

b. Following the arrival of the second, she reflected that she had done her duty to the dukedom and could now *please herself*.(LOB Corpus)

第五に，Pesetsky(1995: 309)は注105において，彼の分析を適用すれば，(6 ab)に現れる日本語の「悲しむ」「楽しむ」のような動詞もゼロ形の再帰的な接辞をもつことになるという。しかし，この分析にはほとんど何の根拠もない。Pesetskyは，日本語もpro-dropを許す言語だとして，このこととゼロ接辞の存在を関係づける可能性を示唆しているが，日本語にはロマンス語にみられるようなclitic的代名詞は一切存在しない。

(6) a. Tanaka-ga sono sirase-o kanasin-da.

'Tanaka was sad about that news'

b. Taro-ga ongaku-o tanosin-da.

'Taro was amused at the music.'

以上指摘したように，Pesetskyの分析には相当の無理が見られる。しかし，フランス語の再帰動詞s'étonnerとそれに対応する英語の再帰動詞(拘束形態素)についてのPesetskyの意味的な考察は興味深い。彼は，感情表現が天候表現と関連するのではないかとし，次のように述べている。

> Emotions like surprise, annoyance, and amusement are indeed like the weather in a number of respects. They are "global" (ambient), affecting one's perceptions as well as actions. They are transitory. They are somewhat unpredictable in their onset, intensity, and duration. Most important for our purposes, the proximate cause of both weather and emotions can be viewed as a force of nature, beyond conscious control of the individual.
>
> (Pesetsky 1995: 111)

即ち，人間の感情は天候と同様に個人の意志の支配が及ぶものではなく，自然の力(natural force)であるとしている。更に，emotional weather(＝人間の感情)においては，自然の力は個人に内的なものであるとしている。これを彼はambient Causerと呼び，経験者との間にコントロール関係を結び，フランス語ではcliticとして顕在化し，英語では音形はもたないが，再帰性の正体であるとみなしている。

ここで最も注目すべきことは，人間の感情を自然の力に支配されたもので，意識的にコントロールできないものとして捉えている点である。これは英語がEO動詞を他動詞表現として顕在化させ，感情の担い手である経験者を常に受動的な立場のものとして表現していることに1

つの説明を与えている。しかし，Pesetskyの最大の問題点はこの洞察をすべての言語に当てはめようとしたことである。日本語の表現では，感情はこのように捉えられていないことを次節で示す。

3. 日本語のES動詞と他動詞化

冒頭で述べたように，日本語の心理動詞は，主語を経験者とするものが基本である。これに使役の形態素を付加することにより他動詞化させることができる。

(7) a. 家族全員がその知らせを喜んだ。

b. その知らせは家族全員を喜ばせた。

c. 子供達は両親を喜ばせようとした。

(7 b)のように無生物が主語になる文は，やや翻訳的な口調を感じさせるが，現代の日本語ではほとんど違和感はない。(7 c)のように人が主語にきた場合には，何かによってという使役の手段が暗黙に了解されているように思われる。例えば次のような場合である

(8) a. 子供達はよい成績を取って両親を喜ばせようとした。

b. 子供達は思いがけないプレゼントで両親を喜ばせようとした。

上述の「喜ぶ－喜ばす(喜ばせる)」のような関係は，日本語ではきわめて広範にみられる。以下にその代表的なもののリストを挙げる。

(9)

喜ぶ	喜ばす
悲しむ	悲しませる
怒る	怒らす
驚く	驚かす
嘆く	嘆かせる
悩む	悩ます
こわがる	こわがらす
恐れる	恐れさせる
おびえる	おびえさせる
飽きる	飽きさせる
悔やむ	悔ませる
楽しむ	楽しませる
満足する	満足させる

興奮する	興奮させる
感動する	感動させる
失望する	失望させる
動揺する	動揺させる
困惑する	困惑させる
当惑する	当惑させる
がっかりする	がっかりさせる
いらいらする	いらいらさせる

上記のリストを見れば，左の動詞群が基本形であり，右の動詞群がその派生形であることは一目瞭然である。英語と異なり，CAUSは完全に規則的な音形と対応しており，且つこの関係が極めて一般性のあるものであり，語彙的な制限を受けない点を考えると，統語性の強いものであると言えよう。

更に，次の例文では，このような心理動詞が命令文や義務表現に生じ，主語の意志による行為を表わしている。

(10)a. もっと喜びなさい。

b. そんなにがっかりするな。

c. 学生達の態度を怒るべきだろうか。

このような心理動詞の用法は，本質的には「笑う」「泣く」「嘆く」などの動詞と何ら異なるところはない。

(11)a. もっと笑いなさい。

b. そんなに泣くな。

c. 学生達の態度を嘆くべきだろうか。

従って，日本語では，感情表現は受動的にではなく，主語の意志によってコントロールできるものとして捉えられており，「喜ぶ」と「笑う」は同じ性質をもった動詞(非能格動詞)と考えられる。Levin and Rappaport Hovav (1995)の言い方に従えば，どちらもinternally caused verbということになる。

4. フランス語の再帰動詞構文

それでは，フランス語の場合はどうであろうか。フランス語の心理動詞も英語と同様に，非常に多数のEO動詞が存在する。

(12) a. Le comportement de Jean amuse Pierre.

'John's behaviour amuses Pierre'

b. Le froid gêne Marie.

'The cold upsets Mary'

しかし，英語とは異なるものとして，すでに示した再帰代名詞をとる構文がある。統語的には(13 a)のような形式をもつ。

(13) a. NP_2 se V de NP_1(指標は(12)の構文 NP_1 V NP_2 に対応)

b. Marie s'étonne du bruit qu'on fait sur cette histoire.

Marie refl-amazes at the fuss that one makes about his story (Ruwet 1976: 207)

この再帰動詞形は，すべての動詞に許されているわけではなく，例えば gêner(＝embarrass)や tenter(＝tempt)は受動態は可能でも再帰動詞とはならない。

(14) a. Marie *se gêne/est gênée de ce que raconte Paul.

'Mary is upset at what Paul is recounting'

b. Marie *se tente/est tentée d'acheter cette robe

'Marie is tempted to buy that dress' (ibid.: 206)

但し，se gêner は「窮屈な思いをする」という意味では再帰動詞として用いられる。このように，動詞によって再帰動詞の形成が阻止されたりまたは意味の限定が起こったりするということは，この操作が語彙的性質をもったものであることを示している。

フランス語では，この構文は心理動詞に限定されるわけではなく，非常に広範な動詞に適用するより一般的な再帰動詞形成の１つと考えられる。次に示すように，再帰動詞と元の使役他動詞との間には規則的な対応関係がある。

(15) a. briser 'break' se briser 'be/become broken'

b. endormir 'put to sleep' s'endormir 'go to sleep'

c. coucher 'put to bed' se coucher 'go to bed'

Grimshaw(1982)は，下位範疇化の上では代名詞 se が元の他動詞の目的語に相当していること，しかしながら派生した再帰動詞は統語的には自動詞構文としての性質をもつことを論証している。例えば，(16 b)(17 b)が示すように，名詞句の外置(NP Extraposition)は自動詞構文のみに許され他動詞構文には適用しない。しかし，再帰動詞構文への適用は可能であり，(17 c)は許される。この文が自動詞構文としてふるまっていることの現れである。

(16) a. Un train passe toutes les heures.

'A train goes by every hour.'

b. Il passe un train toutes les heures.

(17) a. Trois mille hommes ont dénoncé la décision.

'Three thousand men denounced the decision.'

b. *Il a dénoncé la décision trois mille hommes.

c. Il s'est dénoncé/se dénoncera trois milles hommes ce mois-ci.

'Three thousand men denounced/will denounce themselves this month'

(Grimashaw 1982: 112)

Grimshaw はその他に，再帰動詞がやはり自動詞構文の性質を示す証拠として faire 使役構文の補文としての特徴も指摘しているが，ここでは例文は省略する。

このような事実に基づき，Ruwet も Grimshaw も他動詞が自動詞化する語彙規則を提案している。これは Pesetsky とは反対方向の派生であり，前節で取り上げた日本語の心理動詞の自他の関係とも逆ということになる。しかし，形態的には明らかに日本語では使役動詞の方がより複雑なのに対して，フランス語は使役動詞の方が単純である。一般的に，形態的に単純な語より複雑な語の方が派生的であると考えられ，派生の方向が逆なのは各々の言語の特質をむしろ正しく反映していると思われる。更に，後述する Levin & Rappaport Hovav (1995)の Detransitivization や影山(1995)の反使役化も，これと同一線上の考え方に基づいた分析であり，本稿でもこの立場をとる。

それでは，再帰動詞構文において主語の意志はどう表現されているのだろうか。(18)が示すように，再帰動詞は命令文にすることができる。

(18) a. Ne vous fachez pas tant.(そんなに怒らないでください)

b. Amusez-vous bien. (楽しんでいらっしゃい)

このような命令文はごく日常的に用いられる表現であり，日本語同様，フランス語のこの種の心理動詞が再帰動詞化(自動詞化)することにより，経験者である主語の意志によって支配できる行為として捉えられていることが分かる。

5. 英語の反他動詞化

英語の他動詞－自動詞(非対格動詞)の交代は，フランス語の他動詞－自動詞(再帰動詞)の交代と平行に考えることができる。しかし，どのような動詞が交代するかという点については言語間に相違がある。例えば，英語の break はフランス語の briser 同様に自他の交代を起こす動詞であるが，フランス語の dénoncer が再帰化する(例文(17)参照)のに対して英語の

denounceは自動詞化しない。冒頭でも述べたように，心理動詞についても，フランス語と異なり，英語ではほとんどの動詞が交代を起こさない。この節では，Levin and Rappaport Hovav（1995）（以下L&Rと表わす）がこのような英語の他動詞—非対格動詞の交代現象をどのように扱っているのかを見て，それがなぜ心理動詞にかからないのかを考えてみよう。

L&Rは英語の自動詞のうちで，その動詞が表わす出来事を引き起こす外的誘因（External Cause）をもつ変化動詞が自他の交代を許す動詞であるとしている。このような動詞は，意味構造において2つの事象をもつと考えている。

（19）a. Pat broke the window./The window broke.

b. Antonia opened the door./The door opened.

（20）break: [[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME BROKEN]]

外的誘因にあたるxは動作主でも道具でも自然の力でもよい。

（21）The boy/The rock/The earthquake broke the window.

これに対して，laughのような典型的に非能格動詞と言われる動詞は，自他の交代が許されず，意味構造では単一の事象しかもたないと考えられている。

（22）a. The crowd laughed.

b. *The comedian laughed the crowd.

（23） laugh: [x LAUGH]

L&Rは，自他の交代は(20)のような構造をもつ使役動詞が使役性を失うこと（detransitivization）であると考えている。即ち行為の誘因がそれ自体の内にあり，変化の対象そのものが同時に誘因となる場合である。by itselfという副詞表現がこのような動詞と共起できるというのはその1つの証拠である。

（24）a. The plate broke by itself.

b. The door opened by itself.

影山（1995）は，その他にwithout any effort, effortlessly, only with great difficultyのような副詞表現の生起や，命令文の可能性，wouldn't の意志的解釈の可能性もこれらの自動詞の主語が使役者としてはたらいている証拠として挙げている。

（25）a. The glass broke without any effort.

b. The door opened only with great difficulty.

（26）a. Sink, boat!

b. Close, door!

（27） The door wouldn't open no matter how hard I pushed or pulled.

外的誘因をもつ動詞でも，このような内的な使役者としての解釈が不可能な場合，即ち外からの動作主の介入が不可欠であると考えられる場合には，自動詞化はできない。次の例文では，約束や契約を破るのは誰かによってであり，自然に破られるものではない。従ってこのような用法の break は自動詞化しない。

(28) a. He broke his promise/the contract/the world record.

b. *His promise/The Contract/The world record broke. (L&R: 105)

同様に，kill/assassinate/murder のような動詞も，必ず意志をもった動作主によって引き起こされる行為を表わすので自動詞化できない。

(25) a. The terrorist assassinated/murdered the senator.

b. *The explosion assassinated/murdered the senator. (ibid.: 102)

また外的誘因に特別の制限がある場合にも自動詞化は阻止される。例えば cut は自動詞化しない。この動詞の意味の中に，鋭い刃物を用いる行為であることが含意されており，使役のされ方にある特定の制限が課されているからである。

(26) a. The baker/The knife cut the bread.

b. *The bread cut.

影山(1995)は，break/open 等を能格動詞(ergative verb)と呼び，[1] その自動詞化を L&R 同様反使役化と捉え，概念構造において使役誘因と対象物に同一指標を与える操作と考えている。その結果，使役誘因は抑制(suppress)される。

(27) a. The door opened.

b. [CAUSE X_i [BECOME [BE y_i OPEN]]]

L&R は，これを使役者が語彙的に束縛される操作(lexical binding)としている。いずれも，このような語彙操作によって使役者が統語的には顕在化しないことを説明しようとしている。

注意しなければいけないのは，ある動詞がそもそも外的誘因をもち得る動詞かそうでないかというのは，認知によって裏付けられた普遍的なものではなく，言語間の相違もあれば，個人間の相違もあり得るとしている点である。従って L&R によれば，deteriorate などという動詞の場合，(28)のような外的誘因の解釈を要する文を容認するかしないかで話者間に揺れが見られるという。

(28) The pine needles were deteriorating the roof. (L&R: 99)

また，shudder や blush のように完全に自己コントロールされた内的な行為とみなされる動詞は，外的な使役者を許さず，自動詞構文(非能格動詞構文)にしか現れない。

(29) a. Mary shuddered.

b. *The green monster shuddered Mary. (ibid.: 90)

shudder/blush/hesitate などはある種の感情を表現する動詞であるが，英語では，いわゆる心理動詞の中にはこのようなものは数少ない。実際，shudder や blush もその語の本来的な意味はもっと物理的なものである。英語では感情表現は内的にコントロールできるものとして捉えにくいことを示している。

英語の心理動詞がもっぱら他動詞構文として現れるということは，人間の感情が外的誘因によって引き起こされるものだと捉えているわけだが，それでは，そのような心理動詞がなぜ能格動詞としての性質をもたないのか。言い換えれば，なぜフランス語では再帰動詞化が起こるのに，英語の心理動詞はごく少数の例外を除いて，自動詞化(反使役化)しないのか。

第一に考えられる理由は，cut が自動詞化しなかったように，心理動詞の使役にはその動詞に特別な制限があるかもしれないということである。Hatori(in press)では，英語の EO 心理動詞に次のような語彙概念構造を提案している。[2]

(30) Type I: a. [CAUSE ([ ], [GO$_{Emotion}$ ([+PSYCH], [$_{Path}$])])]

b. [CAUSE ([ ], [MOVE$_{Emotion}$ ([+PSYCH])])]

Type II: [CAUSE ([ ], [INCH [BE$_{Emotion}$ ([ ], [$_{Place}$+PSYCH])]])]

例えば，frighten は Type Ib 型の動詞と考えられる。ここでは，例えば Baker (1988)のように frighten は GO を含み，TO FEAR はその着点であるとする分析とは異なり，frighten 固有の意味である FRIGHT は MOVE に対して様態の関係をもつと考えている。即ち MOVE IN FRIGHT を含意している。Baker の GO TO FEAR OF x の分析では，GO FROM SOLID TO LIQUID の melt が能格動詞であるのに，frighten がそうでないことの説明ができない。しかし，MOVE IN FRIGHT という分析では，IN FRIGHT という様態によって使役の作用を特定化していることになり，自動詞化が阻まれるのではないか。

第二に考えられる理由は，(30)のような意味構造においては使役者と変化対象とに同一指標を与えることができないのではないかということである。意味構造が影山や L&R とは異なるが，単純化して言えば，+PSYCH が付与されているのは経験者に相当する項即ち Theme または Place だけであり，使役者即ち CAUSE の項は +PSYCH ではない。従って，この2つに同一指標を与えることは許されない。更に大胆な仮説を提示すれば，英語では，使役者が +PSYCH になること自体が許されないのではないか。使役者が +PSYCH になれないために対象物との間に同一指標が与えられない。このことによって，例えば move という物理的な意味と心理的な意味の両方をもつ動詞が，物理的な意味でしか自動化しないということが説明できる。

(31) a. They moved John. (psych or non-psych)

b. John was moved. (psych or non-psych)

c. John moved. (non-psych only)

上記の仮説が予測することは，+PSYCH を主語にとる動詞には使役性がないということである。事実，英語の ES 動詞は fear, love, admire のようにある種の価値判断を表わすものがほとんどであり，いずれも使役性をもたない。次節では，この仮説に対する反例と思われる構文を考察する。

6. self 形を伴う心理動詞

前節で，英語においては +PSYCH をもつものが使役者になることを許さないという仮説を示したが，反例として浮かぶのは，第1節の(5)で挙げた再帰代名詞をとる心理動詞の構文である。このような例を取り上げる前に，まず心理動詞構文における再帰化について触れておこう。EO 動詞の項の間の再帰化については，ES 動詞には見られないような制限があることは多くの研究者が指摘するところであり，従来から EO 動詞の分析に関する争点になってきた。(Postal 1971, Belletti and Rizzi 1988, Grimshaw 1990, Pesetsky 1995, Bouchard 1995 等)

(31) a. They fear/hate themselves.

b. ?*They frighten/worry themselves. (Bouchard 1995: 185)

Grimshaw(1990)や Bouchard(1995)はこれを主語名詞句と目的語名詞句との間の意味上のミスマッチということで説明しようとしている。例えば Grimshaw は，frighten の主語は対象の特性(properties)であるのに，目的語の方は個体(individual)であるという type 間のミスマッチだとし，Bouchard は frighten の主語は客観的にとらえることができるもの即ち Concept であり，目的語は意図(intentionality)をもった内的なもの即ち Substantive であるという intentionality におけるミスマッチとして説明している。[3] 前節で示唆した +PSYCH のミスマッチというのも，これと同一線上の考え方になる。

しかし，一見したところこのようなミスマッチを起こさず，再帰代名詞を許す EO 動詞構文がある。このような文は英語の心理動詞構文の中で必ずしも広範に用いられているものではないが，OED にはある程度の用例があり，またその他のコーパスでも時々見られるものである。以下，例文の後に年代が示されているものは OED から取ったものであり，出典の年代を示す。

(32) a. She yawned, and wondered what she could do to *amuse herself* until supper-time. (1902) (=5 a)

b. Following the arrival of the second, she reflected that she had done her duty to the dukedom and could now *please herself.* (LOB Corpus)(=5 b)

c. I *amused myself* by guessing which fellow-passengers were members of the Victorian Society. The man opposite.. did not quite fit my vision of a Victorianist. (1974)

d. Those sections about which readers of the penny press are most ready to *excite themselves.* (1932)

(32)では，心理動詞のamuse/please/exciteが主語に束縛される再帰代名詞を目的語として取っている。束縛関係にミスマッチが許されないとすれば，主語と目的語がいずれも+PSYCHであることになり，+PSYCHは使役者にはならないという仮説に反する。更に，このような例文は再帰形が現れるという点では，フランス語の再帰動詞構文とも共通しているように思われるが，果たしてそうであろうか。

(33)はOED(CD-ROM)のテキスト検索によって，英語の代表的なEO動詞についてこのような構文(self/selvesのついた代名詞と共起するもの)を取るか否かを調べた結果である。各動詞の後の(　)内の数字は検索された例文の数である。[4]

(33)	amaze (0)	amuse (127)	anger (0)	annoy (0)	astonish (0)
	bore (4)	delight (6)	depress (0)	disappoint (2)	disgust (0)
	distress (4)	excite (2)	frighten (0)	grieve (0)	inspire (0)
	interest (24)	irritate (0)	please (30)	preoccupy (1)	satisfy (53)
	scare (0)	shame (3)	shock (0)	startle (0)	surprise (2)
	tire (5)	threaten (1)	worry (8)		

この結果を見ると，再帰代名詞構文を許す心理動詞が極めて限定されていることが分かる。28の動詞のうち13の動詞については，この構文が検索されなかった。但し，あくまでもOEDのテキストという制約があるので，中には他の文献でこの種の構文を取っているものはあるかもしれない。例えばamazeについてはBrown Corpusに次のような用例が見つかった。

(34)a. Then, with a motion so suddenly violent that she *amazed herself,* she tore them in two. (Brown Corpus)

b. Maybe yor are not that gifted either, but how about puttering around with the old paints? You may *amaze yourself* and acquire a real knack for it. (Brown Corpus)

しかし，いずれにせよ(33)に示されている数字の差は顕著である。圧倒的多数の用例が検索されたのは，amuse, interest, please, satisfyであり，これに比べてだいぶ数字的な差はあるが，worry, delight, tire, bore, distressなどがそれに続く。圧倒的多数の用例をもつ動詞が，楽しみ，

興味，喜び，満足というような心のプラスの感情をあらわすものであることは注目すべき点である。delight も同様の動詞と考えられる。worry, tire, bore, distress は，悩み，退屈に関わる動詞である。恐怖や心が打ちのめされることを意味する心理動詞は1例も見つけることができず，この構文とはなじまないことが分かる。

上述のことと無関係ではないと思われる事実として，この構文には非常に明確に主語の意志が表わされているものが多い。例えば(32 c)では by 以下が手段を表わし，いかにして私が楽しんだかを積極的に示している。このような by 句や with 句が生起している例文の数は極めて多い。

(35) a. The pair amuse themselves and astonish us with slogging and run-stealing. (1934)

b. The linguist can satisfy himself.. by going around and exasperating several tobacconists with his "informant-technique". (1963)

c. They would rather not tire themselves by thinking about possibilities. (1875)

また，(32 d)における ready to のような表現も主語の意志を示している。同様のことは(36)～(38)の例にも見られる。(36)は不定詞，(37)は助動詞，(38)は命令文の用法にそれぞれ主語の意志が示されている。

(36) a. I have tried to amuse myself by writing limericks on my troubles. (1896)

b. I endeavoured to satisfy myself of the mutability which had been ascribed to them [i.e. the veins in glaciers]. (1860)

(37) a. They would rather not tire themselves by thinking about possibilities.

b. 'Well, and you want your fortune told', she said...'I don't care about it, mother; you may please yourself. (1847)

(38) a. Do not distress yourself about the child, he is safe. (Mod.)

b. Do not worry yourself about blowing the eggs at the time. (1880)

c. Please yourself. But your're a fool if you don't. (LOB Corpus)

このような例文に見られるように，EO 動詞が再帰代名詞を伴うときには，主語の動作主性(agentivity)が明確に現れており，主語が内的誘因として関わっているのではなく，自己に対して外的誘因としてはたらいているのではないかと考えられる。実際に，(35 a)の例では，この構文は再帰形をとっていない EO 動詞構文と等位接続され，主語は共通の動作主となっている。従って，このような外的な使役者はもはや +PSYCH をもたず，上記仮説に違反しないと考えてよいのではないか。Bouchard(1995)は，例えば They frighten themselves.が'agentive'な読みの場合には，主語は Concept ではなく Substantive になるので，主語と目的語のミスマッ

チがなくなり，再帰形が可能であると説明している。本稿では，主語が +PSYCH をもたず，目的語は +PSYCH をもっていると考えるので，+PSYCH について先行詞と代名詞の束縛関係にミスマッチが起こることになってしまう。これはどう考えたらよいのであろうか。ここでは，語彙的な束縛(抑制)と，統語的な照応関係による束縛との間に相違を認め，統語的な照応の場合には +PSYCH のような性質についての一致を要しないと考えたい。[5] 実際のところ，語彙的に抑制を受けるのは使役者であるのに対し，ここで問題にしている統語的束縛は，使役者が顕在化し先行詞となるような束縛である。その性質は大きく異なっており，異なった制約がかかっても不思議ではない。

7. 結　び

英語の EO 心理動詞はなぜ自動詞化(ES 動詞化)しないのであろうかという素朴な問いが，これまであまり正面から論じられてはこなかった。Pesetsky(1995)は，1つの答えとして，それが拘束形態素であるから顕在化しないのだと論じた。本論文では，各言語によって心理動詞の語彙的な性質が異なることを見た。

日本語の心理動詞は非能格動詞であり，「笑う」などと同様の性質をもつ。即ち，その行為を内的にコントロールできると捉えている。一方，フランス語の心理動詞は能格動詞的なふるまいをする。即ち，本来は外的誘因を使役者とする他動詞構文が元であり，それが再帰動詞化することで自動詞化するのである。

英語の心理動詞は，やはり外的誘因を使役者とする他動詞構文であるが，これが自動詞化しないのは，内的な感情の主体を使役者とすることを嫌うからである。即ち +PSYCH が使役者にはならないという強い制約が英語でははたらいているのではないか。この仮説は，Pesetsky が仮定している英語の心理動詞における ambient Causer の考え方とは相いれないものである。しかし，英語には心理動詞が目的語として再帰代名詞をとる構文が，やや周辺的ながら存在している。これは，フランス語の再帰動詞構文に比べるときわめて制限されたものであり，それほど生産的ではない。使役者がいわば外的に自己に関わる構文であり，反使役化として捉えられるフランス語の再帰動詞構文とは本質的に異なる。自己は他の個体と基本的には異ならないのであり，あくまで外的誘因による他動詞構文の形を保っている。

この考え方を支持する事実として，この主の構文を許す典型的な動詞が喜びや満足というようなプラスの感情をあらわすものであり，例文に主語の意志を感じられるものが多いというのもその為である。即ち，喜びは自分自身の意志で引き起こそうとしたい感情である。これに対

して，恐怖や悲しみなどは，英語では，自らの意志で自発的に引き起こすべき感情とは捉えられていないので，例が見つからないのではないか。この説をより確かなものにするためには，フランス語の再帰動詞型の心理動詞をもう少し丁寧に考察し，英語の再帰代名詞をとる心理動詞との相違点を更に明確にする必要がある。また，ごく少数の動詞に限られるが，自動詞として現れる worry, delight, grieve をどう説明するかについては本稿では取り上げなかった。

注

1．影山は，いわゆる自動詞の中には，自他の交代を許す能格動詞(break, open, etc.)と，純粋に内項しかもたない非対格動詞(happen, appear, etc.)とがあり，この2つは従来，ともすれば混同して unaccusative verbs としてくくられていたが，性質が全く異なることを論じ，異なった語彙構造を示している。

2．ここで Type Ia に分類される動詞としては，goal 項をはじめからもっていると思われる encourage, incline, tempt などが挙げられる。Type Ib の動詞としては，excite, shake, stir, frighten, surprise などの意味的に動的な動詞が挙げられる。これに対して，Type II の動詞としては，amuse, depress, displease, satisfy, touch などが挙げられる。Type I と II とでは，経験者に相当するものの意味役割が異なると考えている。

3．Bouchard は Grimshaw の type のミスマッチという説明を批判し，それでは(31 a)にも同じミスマッチが起こるはずだとしている。Bouchard の intentionality という考え方は Ruwet に負っているようだが，ある存在が外側の視点から見られるか，内側の視点から見られるかということで，Concept, Substantive, I-Subject の3つの概念を区別している。Concept が最も外的なものであり，I-Subject が最も内的なものになる。

4．検索したものの中には，純粋な用例ではなく，OED の単語の意味を定義する文の中で用いられているものもあった。例えば，anguish の意味として，'To distress oneself, suffer severe pain or sorrow.'のように distress oneself という再帰表現が用いられているが，ここに示した数はそのような例は除いたものである。

5．本稿で用いている +PSYCH という意味特性については，Hatori(1996, in press)で導入しているが，感情の担い手を示す概念であり，いわゆる意図性(intentionality)とは異なる。動作主性をもつかもたないかは，意図性とは関係があるが，PSYCH 性とは関わってこないのではないかと考える。+PSYCH についてはもう少し意味的に明確にする必要がある。

参考文献・引用文献

Belletti, Adriana, and Luigi Rizzi. 1988. "Psych-Verbs and θ-theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, pp. 291－352.

Bouchard, Denis. 1995. *The Semantics of Syntax*, University of Chicago Press.

Grimshaw, Jane. 1982. "On the Lexical Representation of Romance Reflexive Clitics," in Joan Bresnan ed.,

The Mental Representation of Grammatical Relations, MIT Press, pp. 87－148.

Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure,* MIT Press.

Hatori, Yuriko. 1996. "The Formation of *Ing*-Psych-Adjectives," 天野政千代他編『言語の深層を探ねて—中野弘三博士還暦記念論文集』英潮社，pp. 237－260.

Hatori, Yuriko. in press. "On the Lexical Conceptual Structure of Psych-Verbs," in T, Kageyama ed. *Verb Semantics and Syntactic Structure,* Kurosio Publishers.

Kageyama, Taro.（影山太郎）1995.「ゼロ形態と概念構造」日本英文学会第67回大会シンポジウム『形態論と意味構造』にて発表

Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: at the Syntax-Lexical Semantics Interface,* MIT Press.

Pesetsky, David. 1995. *Zero Syntax: Experiencers and Cascades,* MIT Press.

Postal, Paul M. 1971. *Cross-Over Phenomena,* Holt, Reinhart and Winston.

Ruwet, Nicolas. 1972. *Théorie Syntaxique et Syntaxe du Français,* Editions du Seuil. tr. by S.M. Robins. 1976. *Problems in French Syntax,* Longman.

Brown Corpus, LOB Corpus in *ICAME Collection of English Language Corpora,* Norwegian Computing Centre for the Humanities.

Collins Cobuild English Dictionary, Harper Collins Publishers.

The Oxford English Dictionary（*Second edition on Compact Disc*）, Oxford Univ. Press.